



連載Ⅱ
ホスピタリティーの
手触り 73

カンボジア、躍進する観光の光と影

旅行作家

山口
由美

子供は観光アトラクションではありません

アンコールワットがあるカンボジアのシエムリアップは、近年、著しく観光業が発展している場所のひとつだ。外国人訪問客数は二〇〇五年の約百四十万人から二〇一二年の約三百万人に、ほぼ倍増した。国全体で見ても観光は、繊維業に次ぐ主要産業である。

しかし、一方で、カンボジアは、いまだ世界最貧国のひとつでもある。そして、一九七〇年代、ポルポトの独裁により人口のおよそ二五%が虐殺された傷痕は、今なお人々の中に色濃く残っている。

今回のシエムリアップ行きは、父が卒業生であるコーネル大学ホテル経営学科の、アジア太平洋地域の卒業生が集まる会に家族で参加したものだ。毎年、各国持ち回りで卒業生が、それぞれの出身国や居住国で開催する。

参加者の目的は、いつしか最長老になった父が何よりそうであるように、まず友人と旧交を温め合うことだが、毎回、観光などお楽しみみのアクティビティーとともに、一日はセミナーが開催され、開催国のホスピタリティー産業に関する勉強もする。

そのセミナーを通じて、観光業が躍進するカンボジアの、観光をめぐる光と影を垣間見る機会があった。



伝統のフラワーアレンジメントを紹介するEGBOK MISSIONのスタッフと生徒

まず目を引いたのは、参加者に配られた資料にあった「子供は観光トラクションではありません」という、ドキリとする一文が書かれた黄色いしおりだった。続いて「孤児院を訪問する前に考えてください」とある。近年、カンボジアで人気を呼んでいる「孤児院訪問ツアー」に警鐘を鳴らすNGOの活動を紹介するものだった。

実際、「カンボジア」「孤児院」「ツアー」などのキーワードでインターネットを検索すると、たくさんの「孤児院ボランティアツアー」なるものが出てくる。ボランティア参加を最初から目的にして組まれたツアーもあれば、一日、半日の手軽なオプショナルツアーもある。

もちろんボランティアツアーというものの、それ自体が悪いのではない。東日本大震災の被災地におけるがれき処理など、現地で必要とされる労働力の提供を目的としたツアーが復興の一役を担ったことは言うまでもない。だが、カンボジアの「孤児院訪問ツアー」が問題なのは、旅行者が孤児院を訪れて子供たちと遊ぶことが、本当に求められていることかどうか疑問だからだ。

警鐘を鳴らすNGOは、孤児たちに必要なのは、親に代わって長期間、安定した関係性を築ける保護者であり、短期間のボランティアは、むしろ彼らの心によい影響を及ぼさないといい。それに年に一度か二度、特定のサポートをする団体が訪問するのならともかく、毎日、入れ代わり立ち代わり、いろいろな大人が遺跡観光と同じように孤児院にやってくる状況は、やはり普通ではない。

参加費の一部が寄付となり、一日なり半日、子供たちの遊び相手になる。それは、確かに一見、好ましい行為だ。参加者側からすれば、最貧国を観光旅行することの引け目を埋め合わせし、その国を本当に理解したと思うのかもしれない。何か「よいことをする」ことで、自分たちの旅にさらなる意味を持たせようとしているのかもしれない。だが、旅行者が、「よいことをした」と満足するために子供たちが存在するならば、

それは健全なことではない。NGOの報告によれば、観光に孤児院が組み込まれることで、孤児の数自体が減っているのに孤児院の数は増えている矛盾と、その裏で、親のいる子供たちまでもが孤児院で生活する矛盾が生じているという。

これまで多くの発展途上国を旅してきて思うことは、本来、観光業ほど、投資する資本が少なく済み、その国の人たちが誇りを持てる産業はないということだ。

貧しくてかわいそうだからと寄付を受けるより、その国の自然や遺跡が素晴らしいと評価され、対価が支払われるほうが、その国の人たちにとって、ずっと幸せなことだ。つまり、孤児院に行くよりも、アンコールワットを見学して、ホテルに泊まり、レストランで食事をして、お土産を買い、普通に観光旅行をするほうが、カンボジアという国に対するリスベクトになる。今、多くのホテルなどでは、NGOと連携し、貧しい若者の雇用やアート作品を販売する連携が始まっている。

カンボジアでは、人口の五六%が二十五歳以下の若者だという。ポルポトによる虐殺の悲劇をいまなお物語る数字だが、それは同時に、若い人材が多い、未来の国であることを意味している。だが一方で、高校進学率は三%以下という厳しい現実もある。

セミナーで見学に出かけたのは、そうした若者たちをホスピタリティ産業に従事させることで、誇りを持って自立させようとするNGO、EGBOK MISSION (Everything's gonna be OK「すべてはOKになる」の略)だった。

壁に生徒たちが自画像と将来の夢を描いた絵が張り出してあった。いくつもの「ホテル」や「レストラン」といった文字が誇らしげに躍っていた。そこには、観光立国として、さらなる飛躍を遂げようとするカンボジアの未来があった。

(やまぐち ゆみ)